

本当に生殖腺防護は必要ないの？

ー現状とこれからを考えようー

座長集約

国立病院機構あきた病院 高橋 大樹
太田西ノ内病院 大原 亮平

近年、小児X線検査の際に生殖腺防護をしない動きが世界的にみられており、小児股関節撮影における生殖腺防護は中止すべきであるとの見解が示されている。しかし、これまでの慣習を変えることは容易ではなく、X線検査に関与する全ての医療従事者がその妥当性を理解し、納得した形で生殖腺防護を中止していく必要がある。

第13回TCRTソリューションカンファレンス ドーズコントロールでは、小児撮影において生殖腺防護の必要性に関して、現状を、秋田県診療放射線技師会放射線安全管理委員会 千葉 大志先生にご講演いただき、現在、明らかにされている生殖腺被ばくによるリスクや、生殖腺防護を行うことによるリスクベネフィットに関する最新エビデンスを、川崎医療福祉大学 竹井 泰孝先生にご講演いただいた。竹井先生は小児股関節撮影における生殖腺防護に関する検討班の班長である。

千葉先生のご講演では、秋田県の現状調査を技師会が行った全国調査と比較して報告していただいた。秋田県の小児股関節撮影での生殖腺遮蔽は76%の施設が行われている状況であり、これは全国調査と同様の割合だった。秋田県の施設では、生殖腺防護の必要性に関する関心は高く、生殖腺防護を中止する動向には肯定的であった。

竹井先生のご講演では、これまでの生殖腺防護に関する詳細な経緯の解説があった。2019年AAPMが生殖腺防護を中止する必要があると声明を発出し、ACPSEM、CAR、HPS、RSNAなどがこの声明を支持、2020年英国BIRは生殖腺防護を推

奨しない内容のガイドラインを発出され、更に2021年NCRPは生殖腺防護を終了するためのNCRP勧告を発出された。検討班は、生殖腺防護の中止が妥当であると考えているが、生殖腺防護の中止には画像診断に関わるすべての医療者や患者だけでなく、広く国民の間にも生殖腺防護中止に係る情報提供や放射線被ばくに関するリスクコミュニケーションの実施が重要とのことだった。今セッションでは、日本診療放射線技師会の生殖腺防護中止に向けた活動報告、生殖腺防護を中止した施設の意見、患者反応など活発な意見交換が行われ、有意義なセッションとなった。

ソリューションカンファレンス ドーズコントロールは、青森で開催された第7回TCRTからはじまり第13回まで計6回開催させていただいた。第12回TCRTまでは秋田循環器脳脊髄センター 加藤 守、国立病院機構あきた病院 高橋 大樹が企画を担当、第13回TCRTは、高橋と太田西ノ内病院 大原亮平で企画を担当した。取り上げさせていただいた内容は、患者被ばくからスタッフの被ばく、管理まで被ばくに関する事項を広く扱った。全ての内容が参加者にとって勉強、参考になるもので、十分にTCRTの一プログラムを担えたと自負している。今後のTCRTでも被ばく防護という普遍的なテーマで参加者と十分に討論できる企画を扱っていただきたいと切に願う。

最後に、この企画を立案してくださった船水様、各大会長、各運営スタッフの皆様に感謝を申し上げます。